

＝はじめに

僕は豊太郎が結局エリスを置いて日本に帰ってしまったという終りかたは、まるで豊太郎が自分の運命に最後まで向かい会わずに逃げてしまったような印象を受けたので、続編を書いてそこで再び豊太郎を過去と向かい合わせようと思います。しかし、敢えてここでは実際に運命と向かい会い、どうなったかは書きません。そのところはご自由に想像していただければ幸いです。ちなみに文体は現代風に直します。

＝続舞姫＝序章＝予感

私は今、心に一抹の不安を感じている。

なぜならば忌まわしき私の過去が私を今また呼んでいるような気がしてならないからだ。あれから既に三十年もの月日が流れてしまったが、未だあの忌まわしき過去は私を解放してくれるつもりなどないのだろうか…。これは単なる私の思い過ごしなのかも知れないし、杞憂に過ぎないのかも知れないが、私がこう思う理由を明らかにするためにも、こう思うに至った過程をはっきりとさせるためにも、私が日本に帰ってから今に至るまでのことを思い返してここに書き綴るとしよう。

あれから私は日本に帰り、語学の才能を買われて天方伯の下で働いた。働くこと数年、病も次第に癒え、省内での地位を確立しつつあった私は、さる良家のご令嬢と結婚することとなり、次第に持ち直していくうちに、いつしかエリスのことを忘れつつあった。その次の年には子供も産まれた。その子には私のようにはなるな、勇気ある子になれ、という思いを込めて勇太郎と名付けた。彼は私と同じように毎日勉学を欠かすことなく、幼少の頃より常に首席で、東京帝国大学にも難無く入学し、十九の時に卒業した後は外務省に勤め、そこでの仕事振りが認められ、この度奇しくもあの頃の私と同じ様に、外交の仕事ではあるが、ドイツに派遣されることとなったのだが…。

ここまで思い返してみても私はふと気付き、そして思った。

私の心に去来した一抹の不安は実は我が子勇太郎が私と同じ道をいままで歩んでいるから、もしかしたら彼が私の様に道を踏み外し、それにより私の過去と向き会うのを恐れていたからではなかったのか…。

いや、よもや彼に限ってそんなことはあるまい。やはり単なる私の思い過ごしに過ぎないのであろうか。

それはそうと今ここに勇太郎からの手紙がある。今から読んでみるとしようか…。

第二章 勇太郎からの手紙      ＝因果は巡る＝

私が日本を離れてから早二年が過ぎましたが、お元気ですか？私は訳有って近々日本に帰ることになりそうです。現地が物騒になって来ているというのがその理由なのですが、その時、私はエリーゼという女性とともに帰ってきます。彼女は三十年前に母エリスを捨てた日本人留学生の父を探しているそうです。彼女は日本人留学生ということで貴方にも是非会って父親探しを手伝って欲しいそうです。何かしっていればそのときはよろしくおね

がいします。